

特別講演 2

「不眠症治療の新たな知見

～オレキシン受容体拮抗薬の位置づけと使用経験～」

愛媛大学医学部附属病院 睡眠医療センター長

岡 靖哲 先生

不眠症治療においては、不眠の背景にある睡眠・覚醒メカニズムの理解が不可欠である。脳の睡眠系の神経伝達物質は GABA を主体とし、睡眠物質の蓄積により睡眠を誘導する恒常性維持機構は睡眠系の働きである。覚醒系はモノアミン、コリンおよびオレキシンが主な神経伝達物質として働いている。睡眠系と覚醒系は相互を抑制する関係にあり、シーソーのバランスのように睡眠－覚醒を移行するが、そのタイミングを規定しているメカニズムが体内時計系である。

不眠症の薬物治療の問題点が近年クローズアップされ、適正使用ガイドラインが策定された。ベンゾジアゼピン・非ベンゾジアゼピン系薬剤はいずれも GABA 受容体の作動薬であり、睡眠系に作用する。オレキシン受容体拮抗薬は、従来の薬剤とは違う作用機序であり、入眠と睡眠維持に効果を示し、副作用の観点からも従来の薬剤とは異なる特徴がある。同薬剤の使用経験についても解説する。